

ランチョンセミナーのご案内

ランチョンセミナーの整理券を下記の時間帯に配布いたします。
なお、数に限りがございますので、無くなり次第終了とさせていただきますのでご了承ください。

配布場所：グランキューブ大阪・10階

配布時間：11月21日（火） 8時～
22日（水） 8時15分～
23日（木・祝） 8時45分～

ランチョンセミナー1

共催：アライドテレシス(株)

日時：11月21日（火） 11時45分～12時45分

会場：C会場（グランキューブ大阪10階・会議室1001）

演題名：医療系クラウド・IoTの活用とネットワークのセキュリティ対応

演者：山下 芳範（福井大学医学部附属病院 医療情報部 副部長／准教授）
総合情報基盤センター 副センター長、情報セキュリティ部門長）

医療においても、クラウドやIoTが話題になっている。

医療情報システムでもクラウド技術が利用され、ワークフローやセキュリティ対応にも活用される時代となりつつある。

IoTと呼ばれる「モノのネットワーク接続」が急速に広がり、医療機器などでも通信機能を内蔵したものが増え、センサーのネットワーク活用にも広がりを見せている。

さらに、スマートデバイスとの組み合わせなどで、医療におけるネットワークは非常に重要になっている。

このIoTやクラウドが医療においてどのような可能性があり、IoT技術やクラウド技術が実際にどのような応用があるかを紹介する。どのような通信技術が利用され、クラウドやスマートデバイスとの連携の実際を紹介する。

これからの環境では、デバイスだけでなくネットワーク等のインフラの設計やセキュリティ対応も課題となる。

このような新しい利用が広がることを踏まえて、新しいネットワーク技術であるSDNやopenflowを活用した、医療機器やIoT機器のようなエンドポイントへの対応を考慮した、セキュリティ対策の方法についても紹介する。

IoT時代では、ネットワーク接続が基本となることから、医療機器も含めた管理や情報の可視化についても紹介する。

ランチョンセミナー2

共催：アイホン(株)

日時：11月21日（火） 11時45分～12時45分

会場：D会場（グランキューブ大阪10階・会議室1002）

座長：飯田 征昌（公立大学法人 名古屋市立大学病院 医学・病院管理部医事課 技師）

演題名：医療機関におけるWi-Fi無線環境の構築とスマートフォンの活用事例

演者：中西 顕一郎（地方独立行政法人 堺市立病院機構 堺市立総合医療センター
法人本部 経営企画室 リーダー）

医療機関にて情報システムを導入することで、診療部門間あるいは職員間において情報を“即座”に“共有”することが可能となり、業務の効率化、患者サービスの向上、更には安全で品質の高い医療の提供を推進することができる。特に、技術の進歩に伴って高速かつ安全な無線通信

が可能となり、Wi-Fi を搭載するガジェットや医療機器が増加したことから、情報システムを利用する機会はますます拡大している。

堺市立総合医療センターでは、平成 27 年 7 月の新病院への移転に際し、全館網羅的な無線ネットワークを構築した。そして、Wi-Fi 環境下において内線電話やナースコールにスマートフォンを利用するほか、様々な形で無線通信を活用している。

本講演では Wi-Fi 無線環境を構築した実体験に基づく工夫あるいは問題を踏まえ、無線とスマートフォンの活用事例を紹介する。

ランチョンセミナー 3

共催：ニュータニックス・ジャパン(同)

日 時：11 月 21 日（火） 11 時 45 分～12 時 45 分

会 場：F 会場（グランキューブ大阪 10 階・会議室 1004+1005）

座 長：横山 耕典（ニュータニックス・ジャパン合同会社）

テーマ：ヘルスケア IT におけるハイパーコンバージドインフラ（HCI）の適用

演題名：ハイパーコンバージドインフラの概要と大学病院における先進事例

演者 1：澤 智博（帝京大学）

演者 2：小池 淳一（ニュータニックス・ジャパン合同会社）

演者 3：横山 耕典（ニュータニックス・ジャパン合同会社）

広がりつつあるハイパーコンバージドインフラ（HCI）。国内 HCI 市場は 2016 年に 78 億円、2021 年には 304 億円の市場となることが予測されており、今後急速な普及が見込まれております。HCI のパイオニア企業であり、マーケットリーダーでもあるニュータニックスが HCI とは何か？について、またニュータニックスが仮想化インフラやヘルスケア IT にもたらすメリットについて、帝京大学 澤先生による導入事例とともに分かりやすくご紹介いたします。

ランチョンセミナー 4

共催：ケアストリームヘルス(株)

日 時：11 月 21 日（火） 11 時 45 分～12 時 45 分

会 場：G 会場（グランキューブ大阪 10 階・会議室 1006+1007）

座 長：奥田 保男（量子科学技術研究開発機構放射線医学総合研究所病院 医療情報室室長）

テーマ：クラウドで実現する最先端のヘルスケア IT インフラ

演題名 1：オンプレミスとクラウドを併用した PACS 再構築

演者 1：池田 龍二（熊本大学医学部附属病院医療技術部診療放射線技術部門

副診療放射線技師長）

本院ではオンプレミスとクラウドコンピューティングサービスを併用した PACS を再構築した。今回のリプレースでは、①長期的にアドバンテージの得られるシステム構築、②効率的なデータ管理と利活用、③TCO（Total Cost of Ownership）の削減、④災害とリスクに強い PACS の 4 項目を目標とした。

インフラ（通信）が途絶えた中で、BCP 対策としてオンプレミスでの稼働は必要である。さらに広域災害、局地災害においては外部保管・クラウドコンピューティングサービスが有用となる。また、地域連携において画像のオンライン連携を実施する場合、クラウドコンピューティングサービスが効率的に機能する。

今回、本システムの構築から稼働して 1 年が経過した現状を報告する。

今後 PACS を再構築する際には、膨大化するデータの効率的な管理と地域連携の準備、災害・リスクに強いシステムに、クラウドコンピューティングサービスは必要不可欠である。

演題名2：クラウドを活用したこれからの病院情報システム

演者 2：井内 伸一（社会医療法人愛仁会 愛仁会本部医療情報部 部長代理）

社会医療法人愛仁会では、急速な規模の拡大に伴い IT コストが加速度的に増加している。特に電子カルテシステムについては数年に 1 度の更新に莫大な費用がかかる現実がある。国の医療費抑制政策が進み厳しさを増す病院経営において、電子カルテシステムを含む IT への大型投資を従来どおり継続することは困難となることが予想される反面、IT は病院にとって必要不可欠である。この問題を解決するため、「所有」から「利用」へとコスト調達モデルを転換させるべくクラウドを活用したシステムを構築し、稼働後の運用も含めて、様々なメリットとデメリットを確認することができた。

今回、部門システムを含めた電子カルテシステムにおける「利用」モデルを実現したクラウドシステムの構成と稼働後の評価について報告する。あわせて、新たなコスト調達モデルの効果についても報告する。

ランチョンセミナー5

共催：GE ヘルスケア・ジャパン(株)

日 時：11月21日（火） 11時45分～12時45分

会 場：I会場（グランキューブ大阪 10階・会議室 1009）

座 長：黒田 知宏（京都大学医学部附属病院医療情報企画部 教授）

テーマ：VNA & OCDB(Open Connect Database)による最先端の PACS 構築

演題名1：情報管理者の立場から

演者 1：岡本 和也（京都大学医学部附属病院・医療情報企画部）

京都大学医学部附属病院の PACS 更新について情報管理者の立場から報告する。当院では多くのモダリティから発生する大量のデータを保管しており 2017 年 6 月の時点で約 182TB の圧縮済みデータを保管している。2016 年 4 月に現行の PACS システムに更新する際に、DICOM 通信でデータ移行を行うと 3 年以上の期間が必要である事が判明し、大きな問題となった。この問題は移行元ベンダーの構築したデータベースを契約上公開できず、通信のオーバーヘッドの大きい DICOM 通信の利用が必要であることに起因していた。本院では、この問題を解決するために、VNA(Vendor Neutral Archive) という標準形式でデータ保存を行うストレージと OCDB (Open Connect Database) と呼ばれる公開データベースを構築した。この仕組みにより、次期の PACS 更新時には移行期間を短縮することができる。また、この VNA と OCDB はデータの取得が容易で、多くのベンダーからの接続が実現している。

演題名2：放射線科医の立場から

演者 2：八上 全弘（京都大学医学部附属病院先制医療・生活習慣病研究センター）

当院の PACS に求められる機能は次の①～③の通り非常に高度である。①多種多様で大量のデータの管理：他施設データ、thin slice、Angio 動画など、②多数の端末からの画像利用：読影用約 40 台、院内配信約 2500 台、③サブシステムへのデータ提供：3D 画像処理、被曝管理等。これを活用して端末で目的やニーズに合わせて自由自在にビューワが使い分けられる環境の実現を目指しているが、DICOM Q/R による待ち時間の発生や、事前転送の逼迫による遅延、サブシステムでの重複保存に伴う容量不足が問題となっていた。VNA+OCDB の構築により、システム・ビューワを 1 社に揃えてユーザーの利便性を犠牲にすることなくこれらの問題が解消でき、臨床面における画像診断の質的向上、研究面におけるビッグデータの活用も今後期待できる。

ランチョンセミナー6

共催：㈱ジャストシステム

日 時：11月22日（水） 12時15分～13時15分

会 場：A会場（グランキューブ大阪12階・特別会議場）

テーマ：院内データを、単なる「データ」から「価値ある情報」へ昇華させるには(仮)

演題名1：これからの医療情報の2次利用システム（DWH）とは

演者1：高田 克久（株式会社ジャストシステム GSM 事業部 商品企画部）

現在、病院には電子カルテをはじめ、部門システムが次々と導入され、医療情報のデータ化とその2次利用が進むことで、医療の質や病院運営の向上が期待されている。

しかし、異なるベンダーのシステムを導入している場合、データ形式が異なるため、システムをまたいで検索やデータ抽出が難しいという問題が生じている。また、病名や薬品名が表記ゆれをしていると、検索や抽出ができないことも課題である。医療現場はスピードが要求されるにもかかわらず、膨大なデータ量に対する検索や抽出は時間が掛かり、データの抽出や分析には高いスキルが要求されるため、データの2次利用が十分に進んでいないのが現状である。

これらの課題の解決に向けた、ソリューションをご紹介します。

演題名2：診療を記述する標準的なデータモデルを用いたDWH・BI基盤にかける期待

演者2：島井 健一郎（千葉大学医学部附属病院 企画情報部 副部長・特任講師）

電子化、情報化を推進してきた時代から、情報化している前提で、高度にシステムやデータを利活用する情報化医療時代を迎えている。

1つのシステム内、または、複数のシステム間で、データの管理・送受信をするための標準的なマスターやデータ交換規約を標準規格として整備されつつある。

紙などのアナログ媒体をデジタル化したものとしての思考から、発生時点からデジタルで、データベース上から発生するデジタルデータの塊として、交換規約で定義される規格でなく、長期保管を見据えた、適した電子診療録（EMR：Electronic Medical Record）としての記述・定義が検討されている。

千葉大学病院では、診療を記述する標準的なデータモデルを活用した長期EMR基盤、ならびに、複数機関での広域EMR基盤の整備と、医学・医療向け辞書を活用した解析環境の構築を進めている。

ランチョンセミナー7

共催：㈱大黒

日 時：11月22日（水） 12時15分～13時15分

会 場：C会場（グランキューブ大阪10階・会議室1001）

座 長：黒田 知宏（京都大学医学部附属病院 医療情報企画部 教授）

テーマ：情報の病院経営への活かし方 —京大病院のケーススタディー—

演題名1：現場の課題をいかにくみ取るか？—当院の運営企画室における取り組みから—

演者1：加藤 源太（京都大学医学部附属病院 診療報酬センター 准教授）

当院の運営企画室では、病院執行部とも連携して年に一回、総計40にもわたる診療科（部）を対象としたカンファレンスを個別に行っている。また、各病棟へは定期的な病棟ラウンドを運営企画室の実働メンバーで実施し、師長をはじめとする病棟スタッフとの意見交換を実施している。こうしたプロセスは、病院経営の現況や稼働状況についての意見交換の機会であるとともに、カンファレンスは診療科における課題、病棟ラウンドは病棟における課題をくみ取る重要な機会としても位置づけている。これらのプロセスを経て現場の課題が抽出されれば、時に運営企画室も加わり、その解決に向けて現場での調整が行われるが、その際には、医療情報管理掛をは

じめとする院内各部署と連携の上で必要な情報の抽出が求められる機会が多くなっている。これら課題の解決に運営企画室が参画する際には、得られた情報の解釈も含めて、効率性が高いだけでなく関係者間で納得感が得られるような課題解決を心掛けている。

演題名2：コストデータをいかに現場に伝えられるか？

—物流システムによる見える化の可能性—

演者2：平木 秀輔（京都大学医学部附属病院 医療情報企画部 助教）

医療現場においては、ヒトとモノという資源を投入して患者に価値を提供している。その価値を最大化するために、個々の事例においてどの程度の資源を投入し、どの程度の価値を創出することができたのかを適切に把握することが重要となる。しかし、従前は人的・物的資源の投入量を適時かつ納得性をもって把握することは難しかった。前者は未だ難しさは残るものの、後者は昨今の情報システムの進化によってリアルタイムに近い情報把握が可能になりつつある。これらのデータは、経営層の意思決定のみならず現場の課題抽出にも利用できると考えられる。すなわち、創出価値量（診療報酬）とそれに紐づくコストデータを納得性の高い形で提供することで、現場における改善活動の一助になりうる。今回は、物流システムを用いて医療情報部門からどのような情報を提供することができるかについて検討する。

ランチョンセミナー8

共催：富士ゼロックス㈱

日時：11月22日（水） 12時15分～13時15分

会場：F会場（グランキューブ大阪10階・会議室1004+1005）

座長：佐藤 肇（富士ゼロックス㈱ IBSS 事業本部 ヘルスケアビジネス事業部）

演題名：みやぎ医療福祉情報ネットワーク（MMWIN）における文書連携
～病院情報システムの隙間を埋める～

演者：中山 雅晴（東北大学大学院医学系研究科医学情報学分野 教授）

（東北大学病院 病院長特別補佐・メディカルITセンター部長）

みやぎ医療福祉情報ネットワーク（Miyagi Medical and Welfare Information Network: MMWIN）は、宮城県内における病院、診療所、薬局、介護施設から患者データを厚労省標準保存形式である Standardized Structured Medical Information eXchange version 2（SS-MIX2）ストレージに保存し、患者同意のもと、各職種の権限に基づいた閲覧を可能としている。平成29年9月末現在、バックアップデータはのべ患者数約740万人に増え、情報共有同意患者数も4.4万人を超えた。当初、共有できる情報はSS-MIX2標準化ストレージを中心としていたため、患者基本情報や病名、処方、採血結果などが主となっていた。そこで、拡張ストレージの充実を目的に、DocuWorks文書連携システムを導入し、標準化ストレージでカバーできない文書を共有することを可能にした。具体的には透析患者記録や患者紹介、介護連携などであり、広く活用している。本セミナーではその紹介とともに、地域医療介護連携システムとして、我々が抱えている課題、対策、今後の可能性などをお話する。

ランチョンセミナー 9

共催：富士フィルムメディカル㈱

日 時：11月22日（水） 12時15分～13時15分

会 場：G会場（グランキューブ大阪 10階・会議室 1006+1007）

座 長：木村 通男（浜松医科大学 医療情報部 教授）

テーマ：統合診療支援プラットフォームによる診療フローの見える化と
チーム医療の推進

演者 1：寺阪 比呂子（浜松医科大学医学部附属病院 看護師長/看護情報・システム担当）

統合診療支援プラットフォームの活用により看護業務の効率化を推進

- ・入院から退院までの書類や日常業務や日常生活自立度などを一覧化
- ・患者さんの全体像を捉えやすく表示
- ・退院支援ナビを作成し、退院支援の見える化を実現
- ・看護要約のステータス管理、看護計画やアセスメント情報も一覧化し状態を把握

演者 2：金子 龍一郎（浜松医科大学医学部附属病院 医事課 主任）

統合診療支援プラットフォームの導入による医事課業務の変化

- ・退院時要約の進捗管理
- ・文書作成時の省力化と算定漏れ防止
- ・文書コンテンツ等のメンテナンス業務

ランチョンセミナー 10

共催：VIEUMウェア㈱

日 時：11月22日（水） 12時15分～13時15分

会 場：H会場（グランキューブ大阪 10階・会議室 1008）

テーマ：医療 ICT 情報インフラの仮想化

演題名：厚生労働省「医療情報システムの安全管理に関するガイドライン」へ
仮想化の適用検討

演 者：岩丸 宏明（VIEUMウェア株式会社）

ICT 分野が成長し、クラウド、IoT、AI といった新たなテクノロジーが医療の分野においても利用されつつある状況となっております。これらのサービスを診療業務で利用するにはいくつもの課題を検討しなければなりません。その中で、本年5月に厚生労働省「医療情報システムの安全管理に関するガイドライン」が改版されました。本講演では、改版された「ガイドライン」に沿って、仮想化（ネットワーク、サーバ、デスクトップ）技術の活用、適用案、ならびに、リモートアクセス等の手法を含めた、事例を解説いたします。仮想化を活用した、柔軟で、安全な医療 ICT 情報インフラを検討する際のご参考になればと考えております。

ランチョンセミナー 1 1

共催:㈱ファインデックス

日 時: 11月22日(水) 12時15分~13時15分

会 場: I会場(グランキューブ大阪 10階・会議室 1009)

司 会: 長谷川 裕明(株式会社ファインデックス)

テーマ: SS-MIX2 ストレージの活用方法(どう利用する?如何に利用する?)

医療機関連携の重要性が叫ばれて久しい昨今ではありますが、その動きもあって、インフラとして SS-MIX2 ストレージが広く行きわたってきた時代になったと言えます。今後は、SS-MIX2 ストレージのデータをどのように利用し、活用していくかを真剣に考えることが医療機関に求められるテーマではないでしょうか?今回のセミナーでは、SS-MIX2 のデータを現場で率先して利用している講師の先生と、よりよく利用するためのインフラを検討・構築されている先生にご講演頂き、将来における SS-MIX2 データ活用方法をご発表頂きます。皆さまのご来場を心よりお待ちしております。

演題名1: 愛仁会における SS-MIX2 の利用方法と今後の期待

演者 1: 田中 信吾(社会医療法人 愛仁会本部 医療情報部 課長)

愛仁会では、2016年5月の新電子カルテシステムへの更新とともに、SS-MIX2 ストレージの、法人配下全医療機関への展開を開始しました。導入にあたっての課題や、導入後にユーザから期待されることに対する解決方法等様々な活動を通して SS-MIX2 をどう活用すべきかの議論が、今日まで継続してなされております。今日の講演では、この議論内容とその結果ユーザからのフィードバックされた評価について、また法人としての今後の経営戦略策定への活用方法についての考えをお話します。

演題名2: SS-MIX2 ストレージデータを利用するインフラについて

演者 2: 田中 勝弥(東京大学医学部附属病院 企画情報運営部 講師)

多施設に分散した SS-MIX2 標準化ストレージ群に対する患者横断的な検索は、SS-MIX2 標準化ストレージを研究利用するにあたり重要な機能です。ファイルサーバとしての機能に患者横断的データ検索機能を融合させるとともに、施設間横断検索を安全に実施するプラットフォームの試作開発に取り組んでいます。本日はその内容につきお話し致します。

ランチョンセミナー 1 2

共催: NEC

日 時: 11月23日(木・祝) 11時30分~12時30分

会 場: A会場(グランキューブ大阪 12階・特別会議場)

テーマ: 指示システム、看護支援システムで病棟ワークフローを支援する
~確実な指示伝達と新しい看護支援システムによる看護業務支援~

座 長: 松尾 茂(NEC 医療ソリューション事業部 事業部長代理)

演題名1: 医師から看護師への明確な指示伝達を電子カルテで実現する

演者 1: 武田 理宏(大阪大学医学部附属病院 医療情報部)

演題名2: 看護師の思考過程に沿った新しい看護支援システムの構築

演者 2: 中川 里恵(大阪大学医学部附属病院 看護部)

病棟で医師は看護師に指示を行い、看護師は医師の指示と看護計画に基づいた看護スケジュールを立て、患者に処置やケアを実施する。

これらの過程で発生するインシデントは少なくなく、電子カルテシステムが支援を行う必要がある。

指示システムは医師の指示を看護師に明確に提示し、看護支援システムに再入力なく伝達する必要がある。

看護支援システムでは、看護過程に基づき情報収集から看護計画の立案や看護サマリの作成など、看護師の一連のワークフローを支援する必要がある。

今回我々は、看護師のワークフローに基づき、看護支援システムの強化を図った。

本セミナーでは大阪大学医学部附属病院で実現した、指示システム及び看護支援システムを用いた業務支援について提示を行う。

ランチョンセミナー 13 共催：EIZO(株)/EIZO メディカルソリューションズ(株)

日 時：11月23日(木・祝) 11時30分～12時30分

会 場：F会場(グランキューブ大阪10階・会議室1004+1005)

座 長：山本 勇一郎(大阪大学大学院 医学系研究科 情報統合医学 医療情報学)

演題名1：病院情報システムの水平統合環境における運用マネジメント

演者 1：島川 龍載(広島赤十字・原爆病院 経営企画課 経営戦略室)

病院情報システムは、医療業務で必要とする高い専門性や取り扱う情報の機微性、さらには医療制度下における厳格な運用管理体制の構築などが必要とされるため、利用者が実際に操作するアプリケーションのユーザビリティを優先して導入され、システムベンダーに依存したインフラ環境が提供されることが多かった。

これらの状況から、複数のシステムが密結合となっている環境下において、管理する情報システム担当者が構築内容を把握し、適切な運用管理を行うことは多大な労力が必要であったと言える。

上記の解決のために、レイヤー毎に水平統合した環境を構築し、集約・可視化することで、最適な運用マネジメントが確立できるとともに、リソースの有効活用を効率的に行い、病院経営や医療の質向上などに寄与することが可能になると考えている。

今回は、広島赤十字・原爆病院で構築した水平統合環境の稼働から見えてきた運用マネジメントにおける取り組みについて考察する。

演題名2：医用画像モニタ管理の実際

演者 2：原瀬 正敏(豊橋市民病院 医療情報課)

医療施設では、様々なモニタが多く使用されている。特に医用画像モニタは、医師が画像を見て最終決定を行う重要な機器である。米国、欧州では、医用画像モニタ単体として医療機器として販売されているが、国内では医療機器として取り扱われていない。

一方、モニタ診断を運用している施設では、医用画像モニタの劣化に気づかず使用されていたなどのヒヤリハットを経験した報告がある。最適な表示を得るには、解像度や階調特性などのモニタ特性を理解し、性能を維持するための定期的な管理が必要である。日本画像システム工業会より発行されている「医用画像表示用モニタの品質管理に関するガイドライン(JESRA X-0093)」は、国内唯一の医用画像モニタ管理のガイドラインであり、これに沿った管理は最低限必要である。本セミナーではガイドラインを交えながら、当院の医用画像モニタ管理とその効果について、医療情報部の視点から述べていく。

ランチョンセミナー14

共催：テルモ㈱

日 時：11月23日（木・祝） 11時30分～12時30分

会 場：H会場（グランキューブ大阪10階・会議室1008）

座 長：越村 利恵（大阪大学医学部附属病院 副病院長・看護部長）

演題名1：医療安全の観点から考えた医療情報システムの検討

演者 1：寺岡 雅恵（大阪府済生会吹田病院 安全管理室 室長）

昨今、電子カルテの普及が進んでおり、電算化の利点が大いことを反映している。当院でも、今年5月に電子カルテの更新を期に、医療安全の観点から、情報を効率良く収集する為のシステム検討を行った。

今回、その中から入院患者のバイタルデータ4種（血糖値・血圧・体温・酸素飽和度）のデータを電子カルテに取り込むシステム（テルモ社製HRジョイントシステム）にインスリン注射指示のシステムを備えた血糖インスリン管理システム（富士通社製）を連動させたシステムの導入について述べる。

従来のバイタル測定は看護師がベッドサイドにパソコンを持参していたが、用紙との併用となっておりタイムリーに入力出来ていない時があった。特に血糖値に関しては、紙のみの運用となっていた為、測定値入力までのタイムラグ・未記入・記入間違いなどがあった。

今回導入したバイタルデータ取り込みシステムは各機器にあるNFC機能を介して電子カルテへ転送されるため、読み取り間違い、転記間違いが回避される。さらに確実に記載された血糖値と血糖インスリン管理システムの連動により、投与量の計算、実施管理がされるためインシデントが回避されるようになった。

バイタルデータ取り込みシステムと血糖インスリン管理システムの運用による効果を継続・検証し今後の医療安全の取り込みに情報管理を活かした業務改善を図っていく。

演題名2：インフュージョンポンプをもっとスマートに！

演者 2：高田 裕（近畿大学医学部附属病院 臨床工学部 安全管理部医療安全対策室
技術科長補佐）

「スマートデバイス」と言われる機器が一般的になり、またIoT（Internet of Things）と呼ばれる「モノのインターネット化」も始まり、広がりを見せている。

当院で採用している輸液ポンプやシリンジポンプもネットワーク環境や電子カルテ端末への情報取り込みに配慮した製品で、これらの新しい技術の活用を検討しているところである。

本セミナーでは投薬管理環境を中心にITに対応した「スマート医療機器」について

- ・電子カルテもしくは麻酔・重症系の部門システムとの連携
- ・医師、看護師・臨床工学技士等の業務の負担軽減

等を中心に安全かつ効率的な機器管理についてその可能性を多面的に考察する。

ランチョンセミナー 15

共催：インターシステムズジャパン(株)

日 時：11月23日（木・祝） 11時30分～12時30分

会 場：I会場（グランキューブ大阪 10階・会議室 1009）

座 長：南部 茂樹（インターシステムズジャパン株式会社）

演題名：離島での調剤情報共有の取組とデータ活用

演者 1：山口 典枝（メディカルアイ株式会社）

演者 2：前田 隆浩（長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 地域医療学分野 教授）

ICTを活用した医療連携が進む中、長崎県五島市では市内全ての調剤薬局をICTでつなぎ、調剤情報を一元管理するとともに二次利用に向けたシステムを構築した。各薬局でレセプトコンピュータに入力された処方データ（NSIPs®形式）は、自動的にクラウドサーバーへアップロードされて保存・蓄積される。そして、患者の同意が得られた場合に限り、各薬局の閲覧専用PCで調剤情報を閲覧することが可能となり、蓄積されている過去情報と突き合わせることで自動的に重複や相互作用等がチェックされ、服薬指導や疑義照会等に利用される。さらに、本システムを活用し、医療経済学的効果の検証や予防医療への応用等をテーマに、自治体と研究者の協働による二次利用の取組が進んでいる。医療情報の有効活用によって、効果的・効率的な地域医療の提供に貢献できる可能性があり、さらに、多面的に活用することで地域全体の健康増進に繋がることが期待される。